

春よこい

須磨浦山上梅林にて

下田隼人の梅の話

ここれは本当にあった話らしい。江戸時代の初め頃、小田原藩主が、これまでかけていた米の年貢のほかに、麦の年貢もかけると言い出し、小田原や足柄地方の農民はとても困ってしまった。当時、このあたりの名主をしていた下田隼人は、何度もお役人に年貢を上げないように頼みに行ったが、聞き入れてもらえずとうとう、直訴を決心して、橋の下でお殿さまの行列が通るのを待ち、お殿さまの籠にむかって、大声で「年貢を上げないでください！」と頼んでみた。その声はお殿さまに届き、年貢の上がるのは中止になり、農民たちは助かった。しかし、下田隼人は、お殿さまに直訴をした罪で、死罪となってしまう。

人々は、命をかけて農民を守った下田隼人に感謝して、下田隼人の碑を建て、梅の木を植えた。



桜とならんで梅は昔から日本人の心のふる里の花として親しまれてきた花で、その昔、奈良時代に貴族が梅の観賞を楽しんだのが『花見』の起源だとか。その後、屋外での花見の風習が広く庶民に広まったのは、江戸時代徳川吉宗が江戸の各地に桜を植えさせ、花見を奨励してからだといわれている。

東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花

あるじなしとて 春な忘れそ

菅原道真